

道徳面での鍛錬

十二使徒定員会

D・トッド・クリストファーソン長老

道徳面での鍛錬とは、いつでも正しい行いを、正しいからという理由で選ぶことです。難しい場合でも正しい行いを選ぶのです。

第二次世界大戦中、一兵卒として合衆国陸軍に徴兵されていたジェームズ・E・ファウスト管長は士官学校に志願しました。そして口頭試問の部屋に入り、試験官の前に立ちました。ファウスト管長によると、試験官は皆「百戦錬磨の職業軍人」ばかりでした。しばらくすると質問の内容は宗教に関するに移りました。最後の質問は次のようなものでした。

「戦時下においては、道徳的な規範を緩めるべきではないかね。戦闘に伴うストレスを考えれば、平時の生活ではしないようなことを行うのは許されるとは思わないかね。」

ファウスト長老は次のように語っています。

「良い印象を与えて寛大な心の持ち主であることをアピールするチャンスだと思いました。その質問をした試験官が、わたしが教えられてきた標準に従って生活しているような人物でないことはよく分かっていました。『自分には自分の信念があるけれども、それを人に押し付けるつもりはない』と言えばよいのだという思いが頭をよぎりました。ところが、自分が宣教師のとき純潔の律法を教えた数多くの人の顔が目の前に浮かんでは消えていきます。結局わたしは簡潔にこう答えました。『道徳的な標準はどんな状況にあっても変わることはないと信じています。』

口頭試問の部屋を後にしながら、自分の答えは〔試験官の〕好みに合わなかっただろうから……評点はだいぶ低くなるに違いないと決めつけ、それも仕方ないと思っていました。ところが、数日後に試験結果が張り出されると、驚いたことにわたしは合格していました。しかも、士官学校入学を許可されたトップグループに入っていたのです。

これは、わたしの人生を左右する重大な選択でした。」 1

ファウスト管長は、人はだれでも道徳的な選択の自由、つまり選択する権利と、選択した結果に責任を持つ義務を神から与えられていることを理解していました（教義と聖約 101 : 78 参照）。また、好ましい結果を出すためには、道徳面での鍛錬を受けたうえで、道徳的な選択の自由を行使しなければならないことも理解し、身をもって示していました。

ここで言う「道徳面での鍛錬」とは、道徳的な標準に基づいた自己鍛錬のことです。道徳面での鍛錬とは、いつでも正しい行いを、正しいからという理由で選ぶ

ことです。難しい場合でも正しい行いを選ぶのです。自分さえよければいいといった生き方はしません。尊敬に値する立派な人格を備え、キリストのような奉仕を通して真の偉大さを身に付けようと努めます（マルコ 10：42-45 参照）。鍛錬（discipline）という言葉は、「弟子」（disciple）という言葉と語源が同じです。これは、イエス・キリストの模範と教えに従う努力をすることが理想の鍛錬であることを思い起こさせてくれます。鍛錬し、キリストの恵みを受けることによって、徳高く道徳的に優れた人になれるのです。

イエス御自身の道徳面での鍛錬の基本は、御父に従うことでした。イエスは弟子たちにこう説明しておられます。「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。」（ヨハネ 4：34）同様に、わたしたちの道徳面での鍛錬も、基本は御父と御子への忠誠と献身です。確かな道徳的基準を教えてくれるのはイエス・キリストの福音であり、道徳面での鍛錬は、これに基づいていなければなりません。

わたしたちの多くが暮らす社会では、何世代にもわたって道徳面での鍛錬をなおざりにしてきました。真理とは相対的なものであり、何が正しいかは各人の判断にゆだねられると教わってきたのです。罪や悪といった概念は「価値観の押し付け」として非難されてきました。主がおっしゃっているように、「すべての人が自分の道を、自分の神の像を求めて歩」んでいるのです（教義と聖約 1：16）。

その結果、人は自己鍛錬を怠るようになり、社会が強制によって秩序と礼節を保つよう努めなければならなくなりました。各自が自分の意志でコントロールできないために、行政による統制を引き起こしているのです。ある人が新聞のコラムで書いていたように、「[例えば、かつては] 上品で礼儀正しい行いが、野蛮な行いから女性を守ったものだった。しかし現代では、野蛮な行動を思いとどまらせるために、セクハラを規制する法律が求められている。……」

人の行動を規制する力について言えば、習慣や伝統、道徳的価値観が持つほどの力は、警官にも法律にもない。警察や刑事司法制度は、せいぜい、これ以上は譲れないという、文明社会の最後のとりでの役割しか果たせない。行動を規制する法律に頼る傾向が強くなったということは、文明が退化していることを意味するのである。」²

不況により、世界中が広く壊滅的な打撃を受けています。幾つもの原因が重なってこのような事態に陥ったわけですが、おもな原因の一つに、当たり前のように繰り返される不正行為と倫理に反する行為があります。特にアメリカ合衆国の住宅および金融市場についてこれが言えます。対策として、新たにより厳しい規定が設けられました。これによって不正行為を思いとどまる人もいるでしょうが、より巧妙に創意工夫を凝らして法律の裏をかこうとする人も出てきます。³ あらゆる状況を想定し、何が起こっても対処できるよう計算し尽くされた法律など、作れるはずがありません。それにたとえそのような法律があったとしても、執行するには莫大な費用と労力を要します。法律にばかり頼ると、皆が不自由な生活を余儀なくされることになるのです。フルトン・J・シーンビショップは印象深

い言葉を語っています。「わたしたちはキリストのくびきを負うことをよしとしなかったのだから、今、震えながらカエサルのかぶきを負うしかないのだ。」4

結局のところ、社会が腐敗する根本的な原因と兆候を見つけてうまく処理できるのは、各自が内に持つ道徳的な指針なのです。万人に共通する善の基準を確立しようと社会がどんなにもがいても、罪が罪として非難され、道徳的な鍛錬が一般大衆に尊重されるようにならないかぎり、善の基準が確立されることはないでしょう。5

道徳的な規律は家庭で学ぶものです。ほかの人が実行するかどうかをわたしたちがコントロールすることはできません。しかし末日聖徒は、生活の中で徳を実践し、若者に徳を教え込む人を擁護することができます。モルモン書には、紀元前66年から60年まで続いた戦争でニーファイ人を勝利へと導くかなめとなった青年たちの話が出てきます。思い出してください。アンモンの民の息子たちです。この青年たちの人格と規律については、次のように描写されています。

「彼らは託されたことは何であろうと、いつでも誠実に果たす者たちであった。

まことに彼らは神の戒めを守り、神の前をまっすぐに歩むように教えられていたので、誠実でまじめな者たちであった。」（アルマ 53：20-21）

「彼らはまだ一度も戦ったことはありませんでしたが、死を恐れませんでした。そして彼らは、自分の命よりも父親たちの自由のことを考えていました。彼らは母親から、疑わなければ神が救ってくださると教わっていたのです。」（アルマ 56：47）

「わたしの述べてきたこれらの者たちは、これを信じていました。彼らは若いながらも考えはしっかりしていて、絶えず神に頼っています。」（アルマ 57：27）

家庭や教会で従うべき標準がここに 있습니다。わたしたちは教えるときに自分の信仰に頼り、何よりもまず、神に対する信仰を若者に植え付けなければなりません。どんなことがあっても誠実であり、神の戒めを守り、神の御前をまっすぐにまじめに歩まなければならないことを宣言しなければなりません。言葉を変えて言えば、敬虔になるよう教えるのです。人の幸せのために奉仕し犠牲を払うことの方が、自分自身の安泰や財産を最優先するよりもはるかに大切だということを、若者一人一人に理解させなければなりません。

そのためには、一部の福音の原則にたまに触れるだけでは不十分です。常に教えるなければなりません。たいていの場合、模範によって教えるのです。ヘンリー・B・アイリング管長は、わたしたちが努力して達成すべきビジョンについて次のように語りました。「イエス・キリストの純粋な福音は、聖霊の力によって〔わたしたちの子供〕の心に染み渡ります。彼らが真理に対する霊的な証を得ても、後でよいことをしようと考えるようでは十分ではありません。いつか聖く強くなればよいと考えるのでは十分ではありません。わたしたちは彼らが近くにいる間

に、イエス・キリストの回復された福音に心から帰依させることを目標としなければなりません。

これができれば、若者は知識ではなく、自分の生き方から力を得ます。キリストの弟子となるのです。」6

何人かの親が子供に福音を押し付けたくはないと言うのを聞いたことがあります。子供には何を信じて何に従うかを自分で決めてほしいと言うのです。このようにすることで、子供に選択の自由を使わせていると考えているのです。このような親が忘れてるのは、選択の自由を賢く使うためには、真理に関する知識、あるがままの事物の知識が必要だということです（教義と聖約 93：24 参照）。それがなければ、自分の前に置かれる選択肢を正しく理解し評価するよう若人に期待することはとうていできません。敵対者がどんな手を使って子供に忍び寄るか、親は真剣に考えてみるべきです。サタンとその手下は目に見えるものだけを追い求めるよう仕向けるわけではありません。罪を犯し自分勝手な行動を取るよう、あの手この手で執拗に誘い込むのです。

福音に対して中立の立場を取るということは、実は神とその権能の存在を否定することです。子供がはっきりと人生の選択肢を見極め、自分で考えられるよう望むのであれば、神が確かにいて何でもおできになることをわたしたちがしっかりと認識しなければなりません。「悪事は決して幸福を生じたことがない」という悲しい経験から学ばせる必要はないのです（アルマ 41：10）。

親にできることについて、自分の経験から例を挙げて話します。わたしが5歳か6歳のころのことです。家の向かいに食料品店がありました。ある日、二人の男の子と一緒にその店に行こうと誘いに来ました。店にあった売り物の菓子をわたしたちが物欲しそうに眺めながら立っていると、年上の男の子がチョコレートキャンディーを1個つかんでポケットの中にすべり込ませました。その子はもう一人の子とわたしにも同じことをするよう促したので、少し躊躇したものの、わたしたちも同じことをしてしまいました。そしてすぐに店を出て、ばらばらの方向に走って逃げました。家に着くと、だれにも見つからない場所を探して包みを破りました。母がわたしの顔にチョコレートが付いているのを見て事態を察し、わたしを食料品店に連れて行きました。母に連れられて道路を渡ったときには、きっと一生牢屋から出られないと思いました。しゃくり上げ、涙を流しながら店主に謝り、菓子の代金として10セントを支払いました。この10セントは母が貸してくれたもので、わたしは後で働いて返さなければなりませんでした。そのときの母の愛としつけのおかげで、わたしはその時点できっぱりと犯罪人生に終止符を打つことができたのです。

わたしたちはだれでも誘惑を受けます。救い主も誘惑を受けられましたが、「それらを少しも心に留められ」ませんでした（教義と聖約 20：22）。同様に、誘惑に遭ったからといって、あっさりとは陥る必要はありません。陥ることもできますが、陥る必要はないのです。純潔の律法を守ろうと決意しているある若い成人女性は、疑い深い女友達から、今まで「だれとも寝たことがない」ことに対して、

そんなことがあり得るだろうかと言われました。そして「寝たいと思わないの？」と尋ねられました。彼女はそのときのことをこう述べています。「友人の質問には当惑しました。あまりに的外れな質問だったからです。単なる欲望が、道徳的な行動を選ぶ指針になるとはとうてい思えません。」⁷

場合によっては、誘惑を受けたために常習癖に陥る危険が大きくなったり、実際に常習癖に陥ったりするケースがあるかもしれません。教会員の増加に伴い、教会が様々な専門的支援を提供できるようになっていることに感謝しています。この支援によって常習癖に陥らないよう予防したり、克服したりすることができるのです。とはいっても、専門家による治療は本人が意志を貫くのを助けることはできても、本人の意志に取って代わるものではありません。常に怠らず、鍛錬する必要があります。父なる神と御子に対する信仰と、この御二方がイエス・キリストの贖罪の恵みによってお癒しになれるという信仰に基づいて道德面の鍛錬を行わなければならないのです。ペテロの言葉によれば、主は、信心深い者を誘惑の中から救い出す方法を御存じです（2ペテロ2：9参照）。

未来が過去と同じようなものになるとは限りません。経済や政治、社会で信頼を置いてきたものや規範は、これまでのようにこれからも残るでしょう。わたしたちが道徳的な特質を伸ばすならば、人を感化し、ほかの人もわたしたちに倣うようになるでしょう。このようにしてわたしたちは、今後の世の中の動向や出来事に影響を与えることができるのです。少なくとも、この崩壊しつつある社会においてどんなストレスや問題に直面しようとも、道德面での鍛錬は、それらを乗り越える大きな力を与えてくれることでしょう。

この大会で思慮深く靈感に満ちたメッセージを聞いてきました。そして間もなくトーマス・S・モンソン大管長が最後の勧告を与えてくれます。この大会で学んだこと、学び直したことについて祈りながらよく考えてください。そうするならば、実行すべき事柄を御霊が一人一人に教えてくださいます。主の御前を正しく歩み、主と御父と一つとなるために必要な道德面の鍛錬によって、わたしたちは強められることでしょう。

わたしは証人として、中央幹部の兄弟たちおよび兄弟姉妹の皆さんとともに、神がわたしたちの御父であられ、その御子イエスがわたしたちの贖い主であられることを証します。神の律法は不変であり、神の真理は永遠に変わりません。そして、御父と御子は無限の愛をお持ちです。イエス・キリストの御名によって、アーメン。

注

1. ジェームズ・E・ファウスト、*Stories From My Life* [2001年]、2-3
2. ウォルター・ウィリアムズ、*“Laws Are a Poor Substitute for Common Decency, Moral Values,” Deseret News*, 2009年4月29日付、A15
3. 数年前、法律関係の職業に携わる会員に向けて、ジェームズ・E・ファウスト大管長は次のような警告を与えた。「わたしたちが個人または職場で行うことを、何が『正しい』かではなく、何が『合法』かを基準にして正当化することには大きな危険が伴います。こうすることによって魂を危険にさらしているのです。合

法的なことは正しいことでもあるという公式にすべてを当てはめようとする、人の本性の最も善良で尊い部分をないがしろにすることになるでしょう。合法かどうかを基準に行動しては、多くの場合、文明社会の標準よりもはるかに低い標準、キリストの教えから懸け離れた低い標準に基づいた行動しかできません。私的にも公的にも合法であることを基準にして行動する人は、自らの尊厳と価値という最も大切にすべき部分を否定することになるのです。」（“Be Healers,” *Clark Memorandum*, ブリガム・ヤング大学 J・ルーベン・クラーク法科大学院, 2003 年春号, 3)

4. “Bishop Fulton John Sheen Makes a Wartime Plea”, ウィリアム・サファイア 選, *Lend Me Your Ears, Great Speeches in History*, 改訂版 (1997 年), 478 で引用

5. *The Wall Street Journal* 誌の社説に次のような意見が掲載されたことがある。

「罪については、何年にもわたる〔性〕革命の期間に多くの人々が莫大な時間を費やして話題にし、問題として取り上げてきた。ほとんどの教会もこの論争に加わりましたが、罪とはそこで扱われたようなものではない。むしろ、罪については次のことが言える。罪は少なくとも個人の行動に枠をはめるものである。この枠を取り払ってしまった場合、なくすのは罪の意識だけではない。同時に個人の責任感という標準も失われてしまうのである。……

アメリカ合衆国には違法薬物の問題があり、高校生の性行為の問題がある。福祉の問題もあれば、エイズの問題や強姦事件の問題もある。責任ある地位に就く者が進んで皆の前に出て、分かりやすい言葉で道徳について説明しないかぎり、こうした問題はなくならないであろう。つまり、『今の世の中で行われていることは間違っている』と識者が言わなければならないのだ。」（“The Joy of What?”

The Wall Street Journal, 1991 年 12 月 12 日付, A14)

6. ヘンリー・B・アイリング, ショーン・D・ステール, "Inspiring Students to Stand Strong amid Torrent of Temptation," *Church News*, 2001 年 8 月 18 日付, 5

7. サラ・E・ヒンリッキー, “Subversive Virginity,” *First Things*, 1998 年 10 月号, 14